

忙 申 閑

人間は、Fragileです。薄いガラス細工です。いくら屈強な兵士でも、小指ほどの大きさの銃弾一発さえあれば、命を落とし朽ちていく。そんな戦争の儚さを、英国人歌手スティングも同名の曲で歌います。戦争なんて、ワイングラスがお互い殴り合うようなもので極めて馬鹿げた愚かなものです。

戦地でなくても、日常生活の中でも、我々を簡単に一瞬にして壊してしまうものは、たくさんあります。それは病気であったり事故であったり様々です。ほんの数ミリの出血、梗塞あるいは消化管穿孔などで人は容易に命を落とし、あるいは、たった1コピーのウイルスの侵入を許せば、致命

的となることもあります。また、何気ない他人の一言が、ひとりの人間の一生の心の傷になり、自殺を考えるまでになることもあります。

医師が、この高度に発達した医療技術を用いても、人間の心身全体を緻密に透見して一つ残らず病変を捉えることは、現時点ではほぼ不可能です。また例えそれが将来可能となったとしても、その病変が我々を一瞬にして壊してしまうハンマーとなり、その人が天寿を全うするまでに致命的な急性症状を引き起こすかどうかは、完全には予測がつかないでしょう。これは活断層の位置が詳細に分かっているにもかかわらず地震予知ができないのと似ています（地震

Fragile

広報委員 黒岡 正之

学者にはちょっと失礼ですね、すみません)。更に大抵の場合、その急病を起こし得るハンマーは爪楊枝程度で十分なのですからなおさらです。

我々は手荷物を受け取る時など、そこに“Fragile”と書かれた赤いシールが貼られていると、当然取り扱いに慎重になります。しかし、そのシールがないものは、時には平気で床に放り投げたりもします。このようにFragileシールには神経を使いますので、毎日、そんな荷物ばかり運ばされる仕事には就きたくはないですよ。しかし、我々医師はそんな仕事です。毎日、診察する度に、患者さんのその胸にはFragileの赤いシールが貼られていること

を再確認します。

正直、全く疲れて嫌な仕事ですが、自分が選んだ仕事なので仕方がないです。医師として後悔のないように、日々の診療は、“Fragile”、取り扱い注意です。患者さんには失礼な表現になるかもしれませんが、どうか医師の独り言とお許しください。もし、自分の取り扱いが雑だったことで、患者さんの身体や心の中で、いつかカチッとガラスが割れる音がしたら、きっと自分の心の中からはより大きなガシャという音が聞こえてくるでしょう。そう我々医師もFragile。でも我々には、誰が取り扱いに注意してくれるのでしょうか。本当は、一番Fragileなのに。